

## 実践研究 大学教養体育の大学教員準備教育としての eラーニング教材の開発と評価

著者	小林 勝法, 木内 敦詞
著者別名	Kobayashi Katsunori, KIUCHI Atsushi
雑誌名	大学体育研究
号	38
ページ	13-19
発行年	2016-03
その他のタイトル	Review Articles Development and Evaluation of E-learning Material for the Program for the Future Faculty on Physical Education in Higher Education
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00138859">http://hdl.handle.net/2241/00138859</a>

## 大学教養体育の大学教員準備教育としての e ラーニング教材の開発と評価

小林勝法<sup>1)</sup>, 木内敦詞<sup>2)</sup>

### Development and Evaluation of E-learning Material for the Program for the Future Faculty on Physical Education in Higher Education

Katsunori KOBAYASHI<sup>1)</sup>, Atsushi KIUCHI<sup>2)</sup>

#### Abstract

The Program for the Future Faculty is getting more necessary at the graduate schools of sport sciences. The e-learning material was made and provided on the internet for the future faculties of physical education in higher education. the title of the material is "An Idea and Present Situation of College Physical Education". It has 19 slides with narration, and takes around 17 minutes.

The number of the total times of seeing and hearing the material was 196 for 26 months, that is 7.5 per month. These numbers and cost-performance of the e-learning material suggested that the way of FD with e-learning was not effective.

30 persons answered the questionnaires after seeing and hearing the material. These answers indicated high evaluation like "Contents were easy to understand", "These material was good lessons", "Other students should also learn with this", "PFF programs are necessary for college physical education".

Physical education teachers in higher education were gathered from the whole country in order to evaluate the material. They were the directors or the branch managers of Japanese Association of University Physical Education and Sport. They evaluated that the material was good in the area of validity and the practicability of contents and that there is a possibility to use them at FD seminars.

Key word: college physical education, graduate students, program for the future faculty

---

1) 文教大学国際学部

2) 筑波大学体育系

## はじめに

中央教育審議会答申「新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－」（2005）は、今後の知識基盤社会における人材養成の重要性を踏まえ、「大学院に求められる人材養成機能」として次の4点を掲げた。

- ①創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者等の養成
- ②高度な専門的知識・能力を持つ高度専門職業人の養成
- ③確かな教育能力と研究能力を兼ね備えた大学教員の養成
- ④知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材の養成

つまり、従来の①「研究者養成」と②「高度専門職業人養成」の2点に③と④を加え、③「大学教員の養成」を明確に位置付けたのである。さらに、同審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」（2008）では、具体的な方策として、「大学院における大学教員養成機能（プレFD）の強化を図る」ことを提唱した。そして、第2次大学院教育振興施策要綱（2011）では、プレFDの促進を盛り込んだ。

諸外国ではどうであろうか。ドイツでは大学教授資格を設けており、この資格試験に合格しないと正規の大学教授職に就くことはできない（潮木 2009）。「優れた研究者＝優れた教育者」という考えは支持されなくなり、大学教員を一つの専門職能として捉えているという。英国では、高等教育の教育・学習支援機関である高等教育アカデミーが認定する「専門職養成課程」の所定の単位取得が、大学講師の正規採用の条件として義務付けられており、研究志向の高い大学では、これに相当する教育プログラムを博士課程の大学院生に提供しているところがあるという（加藤 2009）。米国でも大学教員準備プログラムが1990年代から始まっている（和賀 2003）。

大学教員準備教育については、我が国におい

ても筑波大学や名古屋大学、京都大学などいくつかの国立大学ですでに取り組みが始められている（京都大学高等教育研究開発推進センター（2011））。名古屋大学では2005年から大学教員準備プログラムを開催しており、その教科書として『大学教員準備講座』（夏目ほか 2010）を公開している。

さて、体育系大学院の実態はどうであろうか。従来は体育系大学院の大学院生のほとんどが、学士課程教育で体育学や教育学を専攻し、保健体育の教員免許を取得していたので、体育学の知識と教育技術は備えていた。したがって、他の学問領域のように研究だけしてきたという教員ではないので、大学教員準備教育の必要性は低かったと思われる。しかし、近年は事情が異なってきた。2011年に全国の大学院生を対象に行った調査結果（小林ら 2012）によると、学士課程で体育を専攻しなかった大学院生（回答数 517 人）は、修士課程で 22%、博士課程で 23%であった。そして、保健体育の教員免許を取得していない大学院生は、修士課程で 42%、博士課程で 40%にも達していた。教員免許を取得していないことは、教育原理や教授学習理論などの教職教養を体系的に学んでおらず、教育実習の経験もないことを意味している。体育学専攻でなかったり、教員免許を取得していない大学院生が全員、大学教員を目指しているわけではないと思われるが、大学教員を目指す大学院生には大学教員準備教育の必要性が高いと言える。

体育系大学院の大学教員準備教育の実態については、日本体育学会が体育系大学学長・学部長会（26 大学）と日本教育大学協会保健体育・保健研究部門加盟（27 大学）の大学を対象として調査を行っている。その結果は公表されていないが、調査の担当者によると大学教員準備教育を行っているのは大規模総合大学の2大学に過ぎなかったという（深澤 2014）。中規模大学や単科大学での実施は難しい実態が示された。

そこで、ウェブ上でいつでも誰でもが学習できるように、大学教員準備教育のeラーニング教材を開発し、大学を問わず利用してもらうことを考えた。その教材の評価結果について報告する。

## 1. 目的

本研究の目的は、教養体育の大学教員準備教育としてeラーニング教材を開発し、それを公開し、その利用状況や利用者アンケート、有識者からの意見などによって、教材の内容の妥当性や提示方法の有効性を評価することである。

## 2. 方法

### 2.1 eラーニング教材のタイトルと内容、公開方法、時期

eラーニング教材のタイトルは「大学教養体育の理念と現状」とし、冠タイトルとして「教養体育プレFDプログラム」を加えた。教材は19枚のスライドにナレーションを付けたもので、課題やクイズなどは入れていない。スライドはスライドショーのように自動で流れ、合計で17分である。なお、途中で停止し、スライドの内容をゆっくり確認することもできる。最初のタイトルスライドを図1に示す。

教材の目的は、タイトルスライドの次のスライドで「この教材は大学教員を目指している大学院生を対象にして、体育学部などの専門体育ではなく、教養教育として行われている教養体

育（一般体育）の理念と現状について理解を深めてもらうことを目的にしています。就職準備として活用されることを期待しています。」と説明した。

スライドは3つのセクションからなっており、そのセクションと主なスライドタイトルは以下の通りである

1. 教養体育の誕生と発展  
学制改革と大学教養体育の誕生  
教育と研究の進展  
おもな大学教養体育批判  
大学設置基準大綱化と改革モデル
2. 大学の目的と教育課程  
大学の目的（教育基本法、  
学校教育法、大学設置基準）  
学位授与と教育課程の方針
3. 教養体育の理念と現状  
体育系学術団体からの提言 2010  
大学教養体育の理念・目的  
大学教養体育の現状  
採用側の懸念：教育能力  
大学教養体育の研究とFD

eラーニング教材はウェブ上で誰でも閲覧できるようにし、公開は2013年6月10日より開始し、2015年7月31日に終了した。なお、2015年9月からはYouTubeで動画として公開している。

多くの大学院生に視聴してもらうために体育系の大学院の研究科長に公開開始の連絡をした。また、（公社）全国大学体育連合のメールニュースで配信した。さらに、大学教員就職セミナーを開催し、参加者には事前にeラーニング教材を視聴するよう課題を課した。同セミナーは次のように2回開催した。

- ・大阪会場 2013年12月21日（土）13：00～16：30  
（常翔学園大阪センター，最寄駅：JR大阪駅）
- ・東京会場 2014年1月25日（土）13：00～16：30

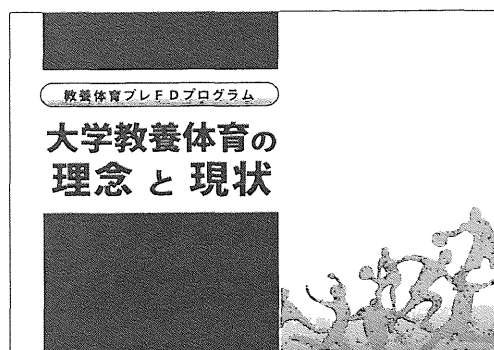


図1 タイトルスライド

(私学事業団総合運動場会議室，最寄駅：JR  
新小岩駅)

さらに，筆者らが教養体育のFD などについて講演したり研究発表する際に，教材の紹介をした。

## 2.2 ログ解析

e ラーニング教材を視聴した場合，その記録がログとしてウェブサイトに登録されるので，それを取得し，いつどのくらいの人が視聴したかについて解析した。

## 2.3 アンケート

e ラーニング教材には視聴後にアンケートに答えるように依頼した。回答は任意であり，身分や年齢，学位，専攻などの属性の他は，教材に対する評価の4問である。このアンケートを集計し，分析した。

## 2.4 有識者による評価会

評価者は大学体育教員の研修会を企画・開催している（公社）全国大学体育連合の支部長や常務理事などで，全国から6人に集まってもらい，教材の評価会（2時間）を行った。そこで得られた意見を分析した。

## 3. 結果

### 3.1 ログ解析

e ラーニング教材を視聴した延べ数は，2013年6月4日から2015年7月31日までの約26ヶ月で196回，月平均は7.5回であった。なお，この視聴回数には複数回視聴した場合や最後まで視聴しなかった場合も含まれている。月毎の視聴回数を図2に示す。最少は0回で，最多は2013年6月の29回である。月ごとの差が大きい。教材の公開通知や講演などのイベントをグラフに示した。これらにおいて教材の広報をしたことが視聴回数の増加に関係していることがわかる。逆の言い方をすれば，このような広報活動がない限りは視聴回数が増えないと言うことである。

### 3.2 アンケート

アンケートは30人から回答があった。その身分と年齢，修得学位，学士課程での専攻は表1に示す通りである。大学院生対象の教材なので大学院生が17人と多い。したがって，20歳代と30歳代が多く，修得学位も修士までが多い。学士課程での専攻は25人が体育・スポーツ系であった。

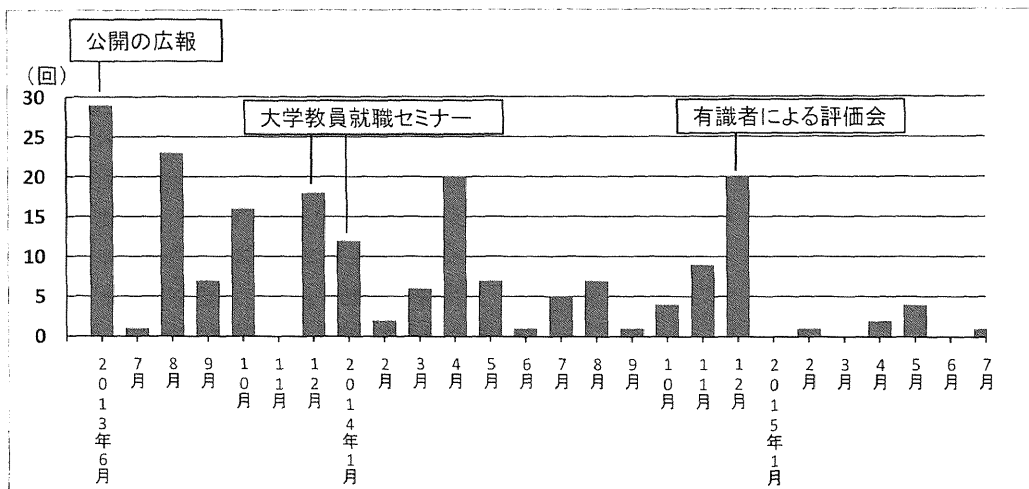


図2 視聴回数（月別）

保健体育の教員免許の取得と教材に関する質問については、大学院生と非常勤教員（19人）と現職教員他（11人）に分けてクロス集計した。その結果を表2に示す。教員免許は大学院生・非常勤教員のうち6人が取得していない。現職教員他と比べるとその比率が高い。体育学全般の知識や教育への理解が比較的低いと思われるが、このことが教材への評価にも表れている。教材の「内容が理解できた」や「受講して良かった」「他の大学院生にも勧めたい」「ブレFDプログラムは必要である」は総じて評価が高いが、大学院生・非常勤教員の方が現職教員他よりも評価が低かった。

教材に対する改善提案や意見などは9件あった。「教養体育の理念と現状を知ってもらうには、適切、貴重な教材だ」と内容の妥当性を支持する意見や「eラーニングによる講義は時間を選べるためとても助かる」と利点を述べた意見、「副教材や法令へのリンクなどがあれば便

利」のような改善提案があった。なお、長文の感想で回答者の状況が示されているものが1件あった。それは、以下の通りである。

教養体育の教員として昨年度、採用（任期なし）された者です。この資料は非常に勉強になりました。博士課程後、研究職（学振PD）として研究活動にどっぷり浸かった後に、教養体育の教員として働き始めた私にとって、教養体育の現状や立場を学ぶ機会はありませんでしたし、学ぼうという意欲也没有ませんでした。ただし、採用に際して、研究業績が重視される中、私のように研究活動を中心に注力してきた者が教員として採用されることは今後も多くなると思われます。このようなFD活動が、特に我々のような若手教員へ、より浸透することを強く望みます。作成に当たられた先生方に心から感謝します。

（30歳代，博士，専任教員）

表1 eラーニング教材視聴アンケート回答者の属性（n = 30）

所属身分	大学等の 専任教員 %	大学等の 非常勤教員 %	大学院生 （修士課程） %	大学院生 （博士後期課程） %	その他 %
年齢層	20歳代 33%	30歳代 40%	40歳代 20%	50歳代 7%	60歳代 0%
取得学位	学士 17%	修士 50%	博士 30%	その他 3%	
学士課程での 専攻	体育・スポーツ系 83%	教育学系 0%	健康系 0%	その他 17%	

表2 eラーニング教材視聴アンケートの回答結果

問1 プログラムの内容を理解できたか	理解できた	まあまあ	あまり	理解できなかった
大学院生・非常勤講師	34%	63%	0%	0%
現職教員他	100%	0%	0%	0%
問2 このプログラムを受講してよかったか	よかった	まあまあ	あまり	よくなかった
大学院生・非常勤講師	47%	53%	0%	0%
現職教員他	82%	18%	0%	0%
問3 他の大学院生へ勧めたいか	勧めたい	勧めてもよい	あまり	勧めたくない
大学院生・非常勤講師	37%	63%	0%	0%
現職教員他	73%	27%	0%	0%
問4 大学教養体育のブレFDプログラムは必要だと思うか	必要だ	まあまあ	あまり	必要でない
大学院生・非常勤講師	68%	32%	0%	0%
現職教員他	82%	18%	0%	0%

保健体育の教員免許の保有率は、大学院生・非常勤講師（n=19）で68%、現職教員他（n=11）で82%であった。

### 3.3 有識者による評価会

2014年12月21日に有識者による評価会を開いた。評価者は教養体育に長年携わり、その事情に精通している（公社）全国大学体育連合の支部長や常務理事など6人である。勤務地は、北海道、北陸、関東、東海、近畿、九州であった。事前にeラーニング教材を視聴し、評価シートに記入してもらい、それをもとに自由討議してもらった。評価シートの記入項目は、「内容の妥当性」と「教材の有効性・実用性」、「教材の継続性・発展性」であった。

「内容の妥当性」については概ね妥当と評価された。具体的な意見としては「歴史が押さえられ、大学の目的及び大学体育の理念と目的が論じられている。その内容は、この教材で学習する大学院生において学士力と大学体育を結びつけることや、大学体育の必要性を考える上で重要な視点を提示している」があった。

「教材の有効性・実用性」についても概ね高く評価された。具体的な意見としては「教材の有効性については、大学の体育科教育に携わることを目指している大学院生に大きな動機付けになると思われる」があった。

「教材の継続性・発展性」については、「全国大学体育連合の実技研修会の際に時間を設ければ、相乗効果が期待できる」や「授業担当者の必修とすべき」などの意見があった。

## 4. 考察

### 4.1 教材の内容の妥当性

教材の内容の妥当性については、有識者による評価会では前述したとおり概ね妥当と評価された。視聴者アンケートでは内容の妥当性について直接的には回答してもらっていないが、自由記述では「教養体育の理念と現状を知ってもらうには、適切、貴重な教材だ」との回答があった。表2に示したように、「他の大学院生にも勧めたい」「プレFDプログラムは必要である」は総じて評価が高かった。しかし、大学院生・非常勤講師と現職教員他とで評価が分かれた。

「理解度」も大学院生・非常勤講師の方が低かった（表2）。これらのことから、大学院生、特に、体育学を専攻していなかったり、教員免許を取得していない者にも理解されやすい内容や説明に改良する必要があると思われる。

### 4.2 教材の提示方法の有効性

前述したとおり、体育系大学院では大学教員準備教育がほとんど行われていない、大学の規模から実施が困難であることも理解できる。そこで、誰でも利用できるようにeラーニング教材を作成し、公開した。視聴者アンケートでは、「eラーニングによる講義は時間を選べるためとても助かる」との意見もあった。しかし、利用者は26ヶ月で196回で、月平均は7.5回と多いとは言えない。広報はしたもの利用者が増えたのは広報の直後や大学教員就職セミナーなどのイベントの時であった。eラーニング教材として無料で提供していくためには管理費がかかることから、これ以上の継続は困難である。したがって、視聴回数や費用対効果の面から見てeラーニングの方法は有効とは判断できない。有識者による評価会でも出されたが、今後は研修会などでの教材として活用することが期待される。

## まとめ

国の高等教育行政や体育系大学院の状況から大学教員準備教育（プレFD）を展開する必要があることから、教養体育のプレFDとして、eラーニング教材を開発し、それをインターネットで無料で2015年7月まで公開した。教材タイトルは「大学教養体育の理念と現状」で、19枚のスライドにナレーションを付けたもので、視聴時間は17分である。

eラーニング教材を視聴した延べ数は、2013年6月から2015年7月までの約26ヶ月で196回、月平均は7.5回であった。視聴回数や費用対効果の面から見てeラーニングの方法は有効とは判断できない。今後は研修会などでの教

材として活用することが期待される。

教材視聴後のアンケートには 30 人から回答があった。教材の「内容が理解できた」や「受講して良かった」「他の大学院生にも勧めたい」「ブレ FD プログラムは必要である」は総じて評価が高いが、大学院生・非常勤教員の方が現職教員他よりも評価が低かった。これらのことから、大学院生、特に、体育学を専攻していなかったり、教員免許を取得していない者にも理解されやすい内容や説明に改良する必要があると思われた。

大学体育教員の研修会を企画・開催している（公社）全国大学体育連合の支部長や常務理事などを努めている大学教員 6 人に全国から集まってもらい、教材の評価会をおこなった。その結果、教材は「内容の妥当性」と「教材の有効性・実用性」において高い評価を得た。そして、「教材の継続性・発展性」については、教材の内容や利用方法について提案があった。

教材は YouTube で動画として公開しているので、今後はその利用状況を注視していきたい。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 24501145 「大学体育の分野別 FD およびブレ FD プログラムの開発」の成果の一部である。また、アンケートに回答していただいた視聴者と評価会に参加していただいた有識者の方々に感謝申し上げる。

## 文献

1) 中央教育審議会「新時代の大学院教育－国

際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－」（答申）、2005

- 2) 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）、2008
- 3) 深澤浩洋・小林勝法・福永哲夫・阿江美恵子・重城 哲「シンポジウム：大学体育教員の資質向上の新しい取り組み」、大学体育、第 104 号、56-71、2014
- 4) 加藤かおり「専門職業人としての大学教員とその養成・研修」、大学教育学会誌、第 31 巻第 2 号、45-49、2009
- 5) 小林勝法・奈良雅之・木内敦詞・嵯峨 寿「大学における体育新任教員の FD の実態と意識」、大学体育、第 98 号、115-123、2011
- 6) 小林勝法・木内敦詞・嵯峨 寿・奈良雅之「体育学専攻の大学院生を対象とした大学教員準備教育に関する調査」、大学体育学、第 9 号、109-116、2012
- 7) 京都大学高等教育研究開発推進センター、「第 17 回大学教育研究フォーラム発表論文集」、183-184、2011
- 8) 文部科学省「第 2 次大学院教育振興施策要綱」、2011
- 9) 夏目達也ほか「大学教員準備講座」、玉川大学出版部、2010
- 10) 潮木守一「職業としての大学教授」、中央公論新社、57-67、2009
- 11) 和賀 崇「アメリカの大学における大学教員準備プログラム」、大学教育学会誌、第 25 巻第 2 号、83-89、2003